

## シンパシーの視線

— 19世紀シンパシー文化から読む「利己主義, もしくは胸中の蛇」

小 南 悠

### 1. はじめに

ナサニエル・ホーソーン (1804-64) が1843年に発表し、後に短編集『旧牧師館の苔』(初版1846年)に収録した「利己主義, もしくは胸中の蛇」(以下, 「利己主義」と表記する)は, 罪と救いをめぐる物語である。自己に囚われ, 胸に邪悪な蛇の存在を感じる主人公ロデリック・エリントンが妻ロジーナによって救われるまでの過程を描いたこの短編は, まさにホーソーン文学の中核を占める罪と救いの主題が前面に押し出されたものであると言えよう。

同時に, 罪人を描いた他のホーソーン作品と同様に, この物語が視線の物語であることもたしかである。たとえば, 物語冒頭で主人公エリントンが読者の前に初めて姿を現す場面は, 次のように描かれる。「惨めな男 [エリントン] は門に近づいてきたが, 中に入らずふいに立ち止まり, 同情心溢れる毅然とした彫刻家の顔をぎらついた目でじっと見据えた」(Hawthorne 269)。<sup>1</sup> 物語におけるエリントンと他者の接触は, 彼の凝視に始まると言ってよい。また, 読み手は, このような見る行為が作品の至る場面で反復されていることに気づく。友人ハーキマーを鋭い眼光で見つめるエリントンは, 町の人に対しても凝視を繰り返し, 彼らの胸の内を暴いていくのだ。事実, 物語において「見る (look)」(270, 274, 275), 「凝視する (gaze)」(276, 278), 「観察する (observe)」(276), 「注視する (watch)」(280, 281) といった語がいくつも用いられている。

ホーソーン文学において、凝視行為が一つの大きな主題であるということは、すでに多くの批評家によって指摘されてきたところであるが、<sup>2</sup>「利己主義」における視線の問題を重点的に扱った批評は、不思議なことに見当たらない。こういった批評の空白を埋めるために、本稿では、エリストンの視線をたどることで、「利己主義」における罪と救いの主題を考察していきたい。

## 2. 罪人の視線

「利己主義」の主人公エリストンの特徴は、その視線にある。自己に囚われ、胸に蛇を宿すエリストンは、町行く人々を引き止めては彼らの胸の内を凝視し、そこに巢食う悪を看破する。たとえば、町でエリストンがある男に会う場面は、「ロデリックは人通りの多い往来で、その男の胸に手を置いて、その強面の顔をまともに覗き込んだ」(274, 傍点引用者)と描写される。エリストンは男の顔を覗き込み、その胸に巢食う蛇の様子を尋ね、困惑する相手を尻目に「はっはっ！」と笑い声を上げて、彼を揶揄する。また、大金持ちが扮する守銭奴に会った際のエリストンは、「この卑しからぬ人物のお腹をあえて熱心に見つめ」、「彼の蛇がアメリカマムシであると断言する」(275, 傍点引用者)。こうして、相手に向けられたエリストンの視線が強調されている。守銭奴の心の内は、エリストンの視線に射抜かれているのだと言ってもよい。さらに、仲が悪いと町で評判の夫婦に会った際、エリストンは「家庭内の問題が悪評の種となっている夫婦を仔細に眺め、二人揃って胸に蛇を宿していることに対して同情の意を表した」(276, 傍点引用者)という。エリストンが若く美しい少女を引き止めて話しかける場面も、「彼は若い美女の手を取って、悲しげに彼女の目を覗き込み、その穏やかな胸には死を招く蛇がいると警告した」(276, 傍点引用者)と綴られる。これらの描写からわかるように、エリストンが他者と接触する場面には、常に、見る行為が付随する。そしてエリストンは、執拗なまでの凝視を通して、人々の心の内に隠匿された「弱さ、過ち、悪徳を鋭く見抜き」、「あらゆる人の胸に自らの病と同じものを見出し」(274)、時に彼らをからかう。エリストンは「むや

みに他人の心の中をのぞき込もうとし、人が触れられては困ると思っているものに触れようとした」(48)と辰巳慧が指摘するように、彼は他者の心は無遠慮に覗く。他者の心の中に踏み入るといふこの点にこそ、エリストンの罪はある。人の心を覗く力を得たエリストンは、自らを特異な存在と捉え、他者と「区分」(274)する。自分という存在を他者の上位に位置づけるエリストンの行為は、傲慢の罪に当たると言えよう。

秘められた個人の心に立ち入り、その秘密を暴くという点で、エリストンのこの覗き行為は、『緋文字』(1850)のロジャー・チリングワースや「イーサン・ブランド」(1851)の表題人物の行為に類するものであるとも言えるだろう。チリングワースやブランドは、しばしば「許されざる罪人」の概念で捉えられる人物たちであるが(Martin 93)、彼らに加えて、エリストンのことも、この「許されざる罪」の範疇に属する者として捉える批評家もいる。たとえば、ジョン・コールドウェル・スタブスは、「利己主義」を「エレノア嬢のmant」(1838)と同列に並べ、これを「許されざる罪」の物語だとしている(Stubbs 92)。ジョン・シュルデーは、エリストンには「人間の魂に対する愛と敬意が欠如」しているとし、それが「許されざる罪」に該当すると指摘する(Shroeder 158-59)。また、ジェームズ・ミラー・ジュニアは、チリングワースやブランドをはじめ、「エレノア嬢のmant」のエレノア嬢、「痣」(1843)のエイルマー、「ラパチーニの娘」(1844)のラパチーニ、『七破風の屋敷』(1851)のピンチョン判事、『プライズデイル・ロマンス』(1852)のホリングスワースとウェスタベルト、そして『大理石の牧神』(1860)のカプチン僧と共に、エリストンもまた「許されざる罪人」の一人であると、直接的に言及している(Miller 91)。<sup>3</sup>

ここで思い起こしたいのは、「イーサン・ブランド」の中で言明されている「許されざる罪」の定義である。曰く、「許されざる罪」とは、「人間に対する仲間意識や神への敬意を打ち砕き、自らの強烈な要求に全てを犠牲にする知性の罪」であり、「永久に苦しむという報いに値する唯一の罪(Ethan 90)」である。この定義に従うならば、先に挙げたような「利己主義のエリ

ストーンが犯す罪は、狭義の「許されざる罪」には当たらないだろう。<sup>4</sup> 彼は、他者を破滅させることがない上に、物語の最後に救われもするのだから。もっとも、エリストンを「許されざる罪人」に分類するミラーも、彼が物語の中で救われる点を考慮していないわけではなく、「許されざる罪」を免れることのできた数少ない悪役であるとした上で、エリストンを特異な存在に位置づけている (Miller 94)。したがって、物語の最後に施されるエリストンの救済も踏まえると、彼を狭義の「許されざる罪人」として捉えることは難しい。とはいえ、この救済がエリストンの罪を帳消しにするわけではない。チリングワースやブランドと同様、エリストンもまた、他者の心の中を覗き見る傲慢な罪人であることはたしかである。したがって、ジェーン・マリー・ルーキーが指摘するように、エリストンが「許されざる罪人」とまではいかずとも、凝視に囚われた「罪人」であることに議論の余地はないのだろう (Luecke 554)。

しかしながら、エリストンは、チリングワースやブランドなどとは異なり、物語の結末で、ロジーナに対し「許してくれ」(283)と悔悟の言葉を口にするという点で、特異な罪人でもある。そうしてエリストンは、胸に巣食う蛇から解放される。物語の結末で「ロジーナの幸せな涙が彼の顔を濡らした」(283)とあるように、蛇から解放されたエリストンを見たロジーナは、幸せのあまり涙を流す。悔悟を拒む罪人が描かれた他の作品とは異なり、「利己主義」は救いの物語なのだ。心の象徴であるロジーナがエリストンとその罪から救済したことは、批評家たちの間でも反駁の余地がないところであろう。たしかに、エリストンは、「他の人のことを考えて、ご自分のことをお忘れなさい」(283)というロジーナの働きかけによって救われるのだ。バータニ・ニューマンの言葉を借りるとすれば、エリストンはロジーナの助けを「受け入れる」(Newman 85)ことができたのだと言ってもよい。そうだとすれば、どうしてエリストンはロジーナのこの言葉を受け入れることができたのだろうか。<sup>5</sup> 彼には、彼女を拒絶する選択肢もあつたはずなのだ。一体何が、あれほどまでに町民の胸を凝視し、彼らの罪を暴いてからかってい

たエリストンを、彼女の勧告に従わせる方向へと導いたのだろうか。物語の深層を理解するためには、それを問わねばならないだろう。

### 3. エリストンの〈シンパシー〉

エリストンはたしかに、胸に蛇を宿した結果、町の人々の胸に秘められた悪の象徴、つまり蛇の存在を暴き、時にそれを擲擲するようになる。兄に憎しみを抱いている男に対しては、「奴の息子の不品行を思い出すと、お前の蛇は跳ね回らなかったか？」(275)と問いかけて男を怒らせ、野心的な政治家に対してはその胸に巣食う蛇の食欲旺盛さを指摘する。著名な牧師には「葡萄酒に入った蛇を飲み込んだな」(276)と話しかけて、彼を憤らせる。このように、エリストンは遠慮容赦なく他者の胸の内を暴き立て、まさに自らが蛇となって人々の胸にその牙を突き立てていく。語り手は、彼のこうした行為を「根性の腐った」(274)ものであると非難する。

このように他者を愚弄して回るエリストンだが、彼が他者と接する描写の中に、注目すべき場面がある。先に挙げた、仲が悪いと評判の夫婦に出会った場面に、興味深い表現が見られるのだ。エリストンは、蛇を宿した夫婦に「同情の意を表した」(276)という。ここでは、“condole”という語が用いられているが、『オックスフォード英語辞典』によると、この短編が発表された19世紀においては、この語には「他者の苦しみに対してシンパシーを示す」(“condole,” def. 2. a) という意味があつたという。また、恋に悩む少女に話しかけるエリストンの描写も、先に挙げたところだが、少女の目を覗き込むエリストンの様子に、「悲しげに」(276)という語が付されていることも、ここで強調しておきたい。蛇を宿した少女を見つめるエリストンの心は、悲しみに濡れているのだ。彼の心は少女に寄り添っている。

これらの場面からわかるように、町で遭遇した夫婦と少女に対し、エリストンは一種の〈シンパシー〉を感じている。彼は他者に同情を寄せることもあるのだ。チリングワースはディムズデルの秘密を知った際に歓喜の表情を浮かべ、ブランドは他者を操り人形としながらも悔悟の色を見せることな

く窺に身を投げる。狂氣的とも言えるチリングワースやブランドと比較してみると、悪徳を見つけた際のエリストンの反応は、より際立ってくる。彼の反応には、他の冷酷な罪人たちと重なる部分もあるのだが、一線を画している部分もある。つまり、胸に蛇を宿す人々に対して嘲笑するような態度を見せる一方で、彼らに対してある種の〈シンパシー〉を示すこともあるということだ。他者に対して〈シンパシー〉を感じるができるというこの点だが、エリストンと他の罪人たちを隔てている大きな差異であると言えるのではないか。エリストンが蛇を持たぬハーキマーに向けて言い放つ、「胸の内は何も持っていないから、君は世の中の人にシンパシーを感じられないのだ」(282)という台詞からは、他者の苦しみを共有する力を、完全に喪失しているわけではないエリストンの姿が窺える。「罪……はしばしば疎遠をもたらすが、それはまた逆説的に共感の手段でもある」とランダル・ステュアートは指摘しているが(Stewart 262)、エリストンは蛇を宿しているからこそ、他者の罪を見抜くことができ、その他者の痛みを〈シンパシー〉を感じるができるのだと言えよう。

ところで、この〈シンパシー〉という語は、19世紀という歴史的な脈に置いて考えるならば、きわめて重要な、かつ複層的な意味を持つ言葉である。18世紀に入り、アダム・スミス(1723-90)の『道徳感情論』(1759)やエドモンド・バーク(1729-97)の『崇高と美の観念の起源』(1757)などに見られるように、“sympathy”という語が注目されるようになる。スミスやバークは、人が他者の苦しみを想像力によって感知し、その相手との同一化を果たすことで、相手の目となって世界を眺め、相手の苦しみを自ら感じ取る行為を“sympathy”と称した。こうして、18世紀から19世紀半ばにかけて、他者の苦しみを共に感じる〈シンパシー〉という概念が広まっていった(Hendler 3; Male 138-40)。そして、「共に一苦しむ(sym-path)」という語源の通り、苦しみを「感じる」のみならず、他者と「共に感じる」という〈シンパシー〉の認識は広く一般的に受け入れられていたという(Male 140)。〈シンパシー〉は、苦しみの共有という18・19世紀特有の文化を表す時代のキー

ワードであったと言えよう。

他者の苦しみを共有するという意味で用いられていたこの〈シンパシー〉の概念は、19世紀前半になってアメリカに流入してきた磁気催眠療法メスメリズムが熱狂的に迎え入れられたことで、やがて複層的な意味を獲得することとなる。1830年代になり、フランス由来のメスメリズムは、アメリカへと浸透していく。ホーソーンの妻ソファイア・ピーボディー(1809-71)も一時期メスメリズムの治療を受けており、施術者が患者の暗部を無遠慮に暴き立てるメスメリズムの暴力性にホーソーンが危惧を抱いていたことは、よく知られたところであるが、このように19世紀のアメリカで隆盛を極めたメスメリズムにおいては、〈シンパシー〉という語が、催眠状態に入った患者と施術者の一体感を表す用語として使われていたという。したがって、19世紀アンテベラム期のアメリカ社会において、〈シンパシー〉の概念の中には、他者と苦しみを共有する意味での〈シンパシー〉と、メスメリズムの文脈での〈シンパシー〉が混在していたというのだ(庄司 132-33)。この時代を生きたホーソーンも、たしかに、『ブライズデイル・ロマンス』の中で、この奇妙な二重性を取り上げている(Levine 207-08)。<sup>6</sup>

こうした歴史的な背景を鑑みると、先に挙げた「利己主義」におけるエリストンの描写は実に興味深い。彼は、胸に悪徳を隠す町民を凝視しては、そこに潜む蛇の存在を声高に指摘する一方で、時に人々に対して同情の意を示す。他者に向けられるエリストンの視線には、二つのモードがあると言ってもよいだろう。それはまさに、他者の秘密を探り当てる暴力的なメスメリストの視線と、他者の痛みを共有した上で相手に同情を寄せることのできる人間味のある視線なのだ。エリストンの視線は、この二つのモードの間をさまよっている。エリストンは、まさしく、19世紀という時代が懐胎した〈シンパシー〉の二重性を体現した人物であると言えるのかもしれない。そのことは、次のようなエリストンの描写からも窺い知れる。

かくて彼は、己の不幸を王者のマントの如く身に纏い、死を招く怪物を

臓腑に持たぬ人間たちを、勝ち誇ったように見下した。しかしながら、彼の人間らしい性質が、友情を乞い求めるという形で彼を支配することのほうが多かった。目的なく一日中通りをぶらついて過ごすことが彼の習慣となったのだ。もっとも、目的なく、と言ったのは、彼自身と世間との間に、ある種の同胞関係を打ち立てることを目的と呼ばない場合の話ではあるが。(274, 傍点引用者)

エリストンは、町の人々を嘲笑し、彼らを見下して回ったという。しかし、この描写の直後、「しかしながら」という逆接を表す副詞が挿入され、エリストンの「人間らしい性質」が彼を突き動かすこともあったと描かれている。孤独に苛まれたエリストンは、時に人間らしい性質に突き動かされ、同胞を求め、町をさまよい歩いたというのだ。この場面で、「人間らしい(human)」という形容詞が付されていることは注目に値する。チリングワースやブランドなど、「人間性の磁力の絆」(“Ethan” 99)を投げ捨てた悪魔的な罪人とは異なり、エリストンには他者の痛みを分かち合える人間らしい感性が残存している。

この意味で、「奴をまだ感じるぞ。あれが咬む！(I feel him still. It gnaws me!)」(273)というエリストンの台詞は印象的である。ちなみに、この箇所は、國重純二訳では、「感じるぞ、奴はまだいる。あいつが咬むんだ！」(107)と訳されている。この台詞について、もちろん、“gnaw”という語が用いられていることから、一義的には、エリストンの胸に巣食う蛇が彼に牙を突き立てていると解釈することはできるだろう。しかしながら、この引用にもあるように、エリストンは作中で蛇そのものを指し示す場合、常に男性三人称代名詞を使用している。したがって、“It gnaws me!”の“It”は、蛇そのものだけでなく、社会との断絶に苦しむエリストンの精神的な状況一般をも含意していると言えるのではあるまいか。そしてまた、エリストンが自らの状況を痛みとして認識していることも、ここで強調しておきたい。エリストンには、〈シンパシー〉の人間として、痛みを分かち合える感性がたし

かに存在しているのである。

かくして、エリストンの中に、夫婦や少女に対して見られるような他者に対する人間らしい〈シンパシー〉の残滓があるからこそ、彼はロジーナの言葉に反応することができたと言えよう。ホーソン作品において、罪人が許されるかどうかはその罪人が悔い改めるかどうかにかかっているというが(Fick 130-40; 入子 63-65),<sup>7</sup>エリストンが「許してくれ」とその行いを悔い改めることができるのは、エリストンに残存していたこの〈シンパシー〉の効力なのだ。エリストンは、他の罪人と同様、神聖な人間の心を覗き込むが、その眼差しには人間の苦しみを感じ取る力が残っている。だからこそ、彼には救いが訪れるのだ。

#### 4. 覗くエリストン、覗くホーソン

ではなぜ、ホーソン作品において見ることに憑かれた多くの罪人が救われない最期を迎える一方で、彼らと同じく見ることに憑かれたエリストンには、他者の苦しみを感じ取る力が残されているのだろうか。エリストンが、ブランドのように罪の探究へとひた走り、破滅を迎えたとしてもおかしくはなかったように思われる。

ここで、「利己主義」発表の翌年、いわばその続編として、「クリスマス晩の宴」(1844)という短編が発表されていることを思い起こしたい。この作品では、蛇の毒牙から解放されたエリストンが作者あるいは語り手として、クリスマスの晩餐会を舞台とした物語を語り紡いでいく。エリストンはホーソンによって、作者あるいは語り手の立場に置かれていると言ってよいのだが、物語冒頭、エリストンはかつての自分を、次のように回想する。「君たちも知っての通り、僕の以前の悲しい経験は、人の心の暗い秘密を見抜く力をいくらか授けてくれたのだ(Christmas 284)」。町行く人を引き止めてはその心の奥を覗いて暴いた「利己主義」での経験があるからこそ、彼は人間の心が抱く秘密を知りえたのであり、そうして晩餐会を舞台とする物語を作り上げることができた。エリストンは、人の心を覗くという罪につながる行為

を犯したからこそ、自分の物語を紡ぎ出すことができるのだ。

物語を紡ぐ人は、エリントンだけではない。彼を創造するホーソーンもまた、職業作家として物語を紡がなくてはならないのであった。ホーソーンもまた、物語作家である以上、物語を作るために人の内側を覗かなければならないのだ。ステュアートは、作家と創作の関係について、次のような指摘をしている。

芸術的な肖像を作り出す人々……もシンパシーの極から遠く引き離される危険にあった。というのも、芸術家は、画家であれ、彫刻家であれ、作家であれ、自らの創作対象を批判的に、かつ冷静に観察しなければならないからである。(Stewart 251)

物語を作る者は、物語を紡ぐために否が応でも創作対象である人間の心を覗き、冷静に分析しなければならない。だとすれば、他者の心を覗くエリストンの視線は、エリストンの心を覗く作者ホーソーンの視線と重なるのではないか。

エリントンがホーソーンの投影である可能性を探ってみる時、共に作家である点以外にも、両者を結びつける要素が浮かび上がってくる。ホーソーンもまた、エリントンと同様、妻によって救われる点である。ホーソーンはたびたび、ソファイアとの結婚によって自らが救われたとし、自分たちをエデンの園にいるアダムとイブに喩えている。ここで思い起こしたいことは、エリントン救済の場面においてロジーナが「東屋」(283)から現れる点である。東屋は伝統的にエデンの園を想起させるものであり、したがって、ロジーナがエデンの園のイブに喩えられていると考えることも不可能ではないだろう。イブのイメージを介して、ロジーナが救うエリストンの向こう側に、ソファイアが救ったホーソーン自身の姿が見えてはこないだろうか。実際に、エリストンの姿をホーソーンその人に重ねる研究者もいると、ここでは言及しておこう (Male 145; Rosenblum 3; Turner 160)。<sup>8</sup>

エリントンもホーソーンも、神聖な領域である人間の心に踏み入らなければ、自らの物語を紡ぎ出すことができないのだ。しかしながら、他者の心に対するこの覗き行為は、人心を掌握するという危険性を不可避免的に孕むものであり、最終的には、ステュアートの主張するように「シンパシーの極から遠く引き離される」ことに帰結していく。ホーソーンは、ロデリック・エリントンなる人物に、自らと同じ作家という立場を与え、人の心の奥を徹底的に覗かせた。そして、エリストンの心に一縷の人間らしい〈シンパシー〉を残しておくことによって、そうした罪がもたらす罰から、エリストンを救い上げた。作家としての自らの視線に罪の意識を覚える作者の意図があるからこそ、エリントンは救われるのだ。人間らしい〈シンパシー〉が込められた視線を忘れない限り、人は許されるのだ。

## 5. おわりに

1850年の夏、ハーマン・メルヴィル(1819-91)は「利己主義」が収められた短編集『旧牧師館の苔』の書評を発表している。ホーソーン作品には「生きとし生けるもの全てに対する無限のシンパシー」(Melville 340)があると、メルヴィルはその書評の中で記している。<sup>9</sup>メルヴィルが感じ取った通り、「利己主義」でも他者への〈シンパシー〉が一つの主題となっていることに間違いはない。しかし、19世紀という歴史的背景を踏まえるならば、〈シンパシー〉という語は、時代を映し出すキーワードであり、その中には、同情の目で他者を眺める視線と、隠されたものを暴き出そうとするメスメリスト特有の視線が渾然一体となって内包されていた。ホーソーンがそうした〈シンパシー〉の持つ二重性を鋭く感じ取っていたことはたしかである。「利己主義」は、こうした19世紀特有の〈シンパシー〉文化の中で描かれた、二つの視のモードをめぐる物語なのだ。片や罪人としての永劫の破滅に帰結する視線があり、片や救済の道につながる視線がある。エリストンの視線は、この視線の分岐点で揺れ動く。そして、他者に向けられるエリストンの両極的な視線はまた、作者ホーソーン自身の揺れ動く視線でもある。どのような

視線が破滅に通じるのか、あるいは、救いに通じるのか。「利己主義」は、19世紀という時代特有の視線の複層性を背景に、〈視線〉の問題を追究した物語であると言えるであろう。

## 注

※本稿は、日本ナサニエル・ホーソーン協会第36回全国大会（2017年5月19日、於・CSA貸会議室レイアップ御幸町ビル5階5-C会議室）において口頭発表した原稿に、加筆修正を施したものである。

1 ホーソーン作品からの引用文は原則として拙訳だが、必要に応じて國重純二訳『ナサニエル・ホーソーン短編全集3』（東京：南雲堂、2015）を参照し、適宜修正を加えている。

2 ホーソーン文学における凝視の主題については、Coaleや丹羽などに詳しい。

3 他にも、レオン・ハワードは、「許されざる罪」を描いた「イーサン・ブランド」の着想が「利己主義」由来のものであるとしている（Howard 121）。

4 エリストンを「許されざる罪人」とするミラーの論について、これまで「許されざる罪」はその定義が曖昧なまま論じられてきたとし、エリストンを「平凡な罪人たち（ordinary sinners）」の一人として捉える論もある（McCullen and Guilds 224-25）。

5 エリストンがロジーナの言葉を受け入れたことで、その罪から救われたというのは、これまでも多くの批評家によって指摘されてきたことである。たとえば、ニュートン・アーヴィンやフィリップ・ヤングは、ロジーナとの再会により、エリストンが自己を忘れる瞬間を持てたことが彼の解放につながったと指摘する（Arvin 135; Young 65）。ニーナ・ベイムは、エリストンが救われるか否かは、彼が受け入れようとするれば心を通わせることのできる女性にかかっている、と述べている（Baym 109）。レオナルド・フィックは、「許してくれ」というエリストンの懇願が罪の告白に当たり、この告白が救いにつながると指摘し、それはロジーナの勧告に促されたものであると述べている（Fick 25）。リチャード・フォークは、ロジーナの手が触れたことでエリストンの救いがもたらされたとし、互いの本質を理解することが和解につながったと指摘する（Fogle 232）。また、ハリー・レヴィン曰く、破綻した結婚生活の回復とロジーナの勧告によって、物語に救いもたらされているという（Levin 54-55）。ジョエル・フィスターは、ロジーナを理想的な女性性の象徴として捉え、彼女の愛がエリストンを救ったとしている（Pfister 144-45）。どの批評でも、ロジーナ側からの働きかけによってエリストンが救われたという点は共通しており、彼女の勧告が救いの契機になったことはたしかである。しかし、エリストンが

なぜ、彼女の言葉を拒絶せずに受け入れることができるのかという点については、これまで議論の俎上に乗せられることがなかったと言える。

6 『ブライズデイル・ロマンス』の語り手カヴァディールは、たびたびブライズデイルの住人たちを覗き見るが、その覗き行為は「シンパシーの過多」によるものであると語られる（Blithedale 154）。他者の痛みを感じ他者に寄り添うはずの〈シンパシー〉も、度を越して行き過ぎると他者への覗き行為と化するのだと、カヴァディールは述べていると言えよう。レヴィンは、この点に着目し、カヴァディールの〈シンパシー〉が持つ両極的な性質について論じている（Levine 207-08）。

7 入子文子は、ホーソーンが考える神の愛は無限であり、「いかに他人の魂と自分の魂に暴力を振るおうとも、その事自体は『許されざる罪』にならない」とし、救いの条件は悔悟であると指摘しているが（入子 63-65）、エリストンが他の罪人と異なり、なぜ悔悟できるのかについては言及していない。

8 ロイ・メイルは、ディムズデールや「牧師の黒いヴェール」（1832）のフーパー牧師に加えて、エリストンも、自らの罪を告白するホーソーン自身の姿であると指摘している（Male 145）。また、アンドリュー・ローゼンブラムは、エリストンを救うロジーナを、ホーソーンの子ソファイアのベルソナとして捉えている（Rosenblum 3）。アーリン・ターナーは、妻によって救われるという「利己主義」の展開が、新婚期の作者にふさわしいものであるとし、この作品を作者の伝記と重ねて論じている（Turner 160-61）。

9 メルヴィルは、この“sympathy”という語を「リンゴ売りの老人」（1843）を論じる箇所を使っており、この語の前後に「深みのある優しさ」、「神のように絶大な愛」といった言葉が用いられていることからわかるように、メスメリズム的な意味でこの語を用いているわけではない。あくまでも、メルヴィル自身がホーソーン作品を読んだ際に感じた「温かみ」のようなものを、“sympathy”と言い表しているのだと考えられる。

## 引用文献

Arvin, Newton. *Hawthorne*. Russell & Russell, 1961.

Baym, Nina. *The Shape of Hawthorne's Career*. Cornell UP, 1976.

Coale, Samuel Chase. *Mesmerism and Hawthorne: Mediums of American Romance*. U of Alabama P, 1998.

Fogle, Richard Harter. *Hawthorne's Fiction: The Light & the Dark*. U of Oklahoma P, 1969.

Fick, Leonard J. *The Light Beyond: A Study of Hawthorne's Theology*. Newman P, 1955.

Hawthorne, Nathaniel. *The Blithedale Romance*. 1852. CE, vol. 3.

———. “The Christmas Banquet; From the Unpublished ‘Allegories of the Heart.’” 1844.

- CE, vol. 10, pp. 284-305.
- . “Egotism; or, the Bosom Serpent; From the Unpublished ‘Allegories of the Heart.’” 1843. CE, vol. 10, pp. 268-83.
- . “Ethan Brand.” 1851. CE, vol. 11, pp. 83-102.
- Hendler, Glenn. *Public Sentiments: Structures of Feeling in Nineteenth-Century American Literature*. U of North Carolina P, 2001.
- Howard, Leon. *Literature and the American Tradition*. Doubleday, 1960.
- Levin, Harry. *The Power of Blackness: Hawthorne, Poe, Melville*. Faber and Faber, 1958.
- Levine, Robert S. “Sympathy and Reform in *The Blithedale Romance*.” *The Cambridge Companion to Nathaniel Hawthorne*, edited by Richard H. Millington, Cambridge UP, 2004, pp. 207-29.
- Luecke, Jane Marie. “Villains and Non-Villains in Hawthorne’s Fiction.” *PMLA*, vol. 78, no. 5, 1963, pp. 551-58.
- McCullen, Joseph T, and John C. Guilds. “The Unpardonable Sin in Hawthorne: A Re-Examination.” *Nineteenth-Century Fiction*, vol. 15, no. 3, 1960, pp. 221-37.
- Male, Roy R., Jr. “Hawthorne and the Concept of Sympathy.” *PMLA*, vol. 68, no. 1, 1953, pp. 138-49.
- Martin, Terence. *Nathaniel Hawthorne*. 1965. Twayne, 1983.
- Melville, Herman. “Hawthorne and His Mosses.” 1850. *Nathaniel Hawthorne’s Tales*, edited by James McIntosh, Norton, 1987, pp. 337-50.
- Miller, James E., Jr. “Hawthorne and Melville: The Unpardonable Sin.” *PMLA*, vol. 70, no. 1, 1955, pp. 91-114.
- Newman, Lea Bertani Vozar. *A Reader’s Guide to the Short Stories of Nathaniel Hawthorne*. G. K. Hall, 1979.
- Pfister, Joel. *The Production of Personal Life: Class, Gender, and Psychological in Hawthorne’s Fiction*. Stanford UP, 1991.
- Rosenblum, Andrew E. “The Idea of Another: Hawthorne’s ‘Friend of Friends,’ Dissociation, and *The Blithedale Romance*.” *Nathaniel Hawthorne Review*, vol. 31, 2005, pp. 1-28.
- Shroeder, John W. “Hawthorne’s ‘Egotism; or, The Bosom Serpent’ and Its Source.” *American Literature*, vol. 31, no. 2, 1959, pp. 150-62.
- Stewart, Randall. *Nathaniel Hawthorne: A Biography*. Yale UP, 1948.
- Stubbs, John Caldwell. *The Pursuit of Form: A Study of Hawthorne and the Romance*. U of Illinois P, 1970.
- Turner, Arlin. *Nathaniel Hawthorne: A Biography*. Oxford UP, 1980.

- Young, Philip. *Hawthorne’s Secret: An Un-told Tale*. D. R. Godine, 1984.
- 入子文子『メランコリーの垂線——ホーソーントンとメルヴィル』関西大学出版部, 2012.
- 庄司宏子『アメリカスの文学的想像力——カリブからアメリカへ』彩流社, 2015.
- 辰巳 慧『ホーソンの人間論——アダム神話的考察』晃洋書房, 1984.
- 丹羽隆昭『恐怖の自画像——ホーソーントンと「許されざる罪」』英宝社, 2000.



—Synopsis—

The Gaze of Sympathy:  
“Egotism; or, the Bosom Serpent” in  
Nineteenth-Century Sympathy Culture

Kominami, Yu

In Nathaniel Hawthorne’s “Egotism; or, the Bosom Serpent” (1843), such words as “look,” “gaze,” “observe,” and “watch” are repeatedly used. These words primarily represent Roderick Elliston’s gaze at others.

As a number of critics have observed, the gaze is a familiar technique in Hawthorne’s characterizations of sinners. In “Egotism,” Elliston often gazes at others and then plays on their feelings, so one can say that he is a sinner possessed with a gaze like other sinners in Hawthorne’s other stories. We should note, however, that while almost all the sinners in Hawthorne’s stories come to miserable endings, Elliston is exceptional in that he can accept his wife’s words and is redeemed by her at the ending of the story. Why is he able to accept her counsel?

This is because though Elliston plays on others’ feelings by gazing at them, he also expresses sympathy for their circumstances, gazing sadly at a girl and condoling with a married couple. His words to his friend Herkimer show that he still has the human nature to sympathize with others. One might conclude that his sympathetic heart enables him to accept her advice at the ending of the story.

In the nineteenth century, the word “sympathy” had two meanings: to have compassion for others and to reveal secrets in others’ hearts in a mesmeric

way. Thus, Elliston, who sympathizes with others but reveals their secrets, is the very type of the duality of the word “sympathy” in Hawthorne’s period.

If that is the case, we need to examine why Elliston is depicted as a sympathetic character. The key to his characterization is that Elliston is an author like Hawthorne himself. In “The Christmas Banquet” (1844), Elliston is portrayed as an author, and as he himself remarks, he has to follow a process of gazing at others in order to complete “The Christmas Banquet.” As some critics have suggested, Elliston may in this sense be regarded as a projection of Hawthorne himself. Hawthorne’s profession as a fiction writer required him to gaze into the hearts of others in order to write a story, but this lays him open to the risk of committing a sin. Therefore, we may argue that while the gaze is a necessary part of Elliston’s character as an author, he is saved from punishment by his capacity for sympathy.

Elliston gazes at others, discovers their secrets, and mocks them, but sometimes sympathizes with them. At the ending of the story, his sympathetic nature saves him. “Egotism” is a story which pursues the matter of gaze and salvation against the background of nineteenth-century sympathy culture.

## 執筆者一覧

小南 悠 (関西学院大学・院)  
高橋 愛 (徳山高等工業専門学校)  
田島 優子 (宮城学院女子大学)  
野崎 直之 (中央大学・非)  
古屋 耕平 (神奈川大学)

---

### The Nathaniel Hawthorne Society of Japan

フォーラム No. 23

---

2018年3月31日 発行

発行者 日本ナサニエル・ホーソーン協会

代表者 高橋 利明

事務局 〒274-0063 千葉県船橋市習志野台7-24-1

日本大学理工学部 鈴木孝研究室

編集室 〒192-0393 八王子市東中野742-1

中央大学文学部 高尾研究室

編集委員会委員

大場厚志、城戸光世、佐々木英哲、高尾直知 (編集長)、

中村栄造、古屋耕平

印刷所 株式会社文成印刷

〒168-0062 東京都杉並区方南1-4-1

TEL: 03-3322-4141 FAX: 03-3322-4144

---



この印刷物のインキは環境にやさしい  
植物油インキを使用しています。